



月刊 さいとく健けん

臨時号

平成24年10月15日発行



「新しい政治を 目指して」

昭和34年、小さな写真屋に生まれる。

大学時代は、ハンドボール部のキャプテンとして活躍。

零細企業に育ったこともあり、中小企業を担当する通商産業省に入省。

日米交渉や行政改革、地方行政(埼玉県副知事に外向)などに携わる。

平成18年衆議院千葉七区補欠選挙にて公募により選ばれるも、惜敗。

平成21年衆議院総選挙において、比例南関東ブロックで初当選。

現在、党政務調査会会長補佐・シャドウキャビネット(影の内閣)の総理補佐官として活動中。

〔趣味〕 読書、カラオケ、ハンドボール

〔好きな食べ物〕 ラーメン、焼肉(特にカルビとハラミ)

さいとう健 後援会事務所(千葉銀行おたかの森支店裏)

〒270-0137 流山市市野谷665-40-103

TEL:04-7157-6223 FAX:04-7157-6224

E-mail : info@saito-ken.jp

さいとう健 国会事務所

〒100-8981

千代田区永田町2-2-1衆議院第一議員会館822号室

TEL:03-3508-7221 FAX:03-3508-3221

日本の政治状況は、大きな転機にあります。

かつて、自民党が長期政権を維持してきた時代には、どんなに野党が足を引っ張っても、物事は何とか進んできました。強行採決をしたり、大臣の首と交換したりして。

しかしながら、政権交代がしばしば起こる新しい時代を迎えて、しかも衆参のねじれが常態化する中で、これまでと同じようなやり方で野党が足を引っ張ったら、物事は全く進みません。さいとう健が当選後直面した国会は、まさに物事が進まない国会でありました。

次の総選挙では、自民党を中心とする政権ができる可能性が高いと言われておりますが、仮にそうだとした場合、再び野党が今と同じように、問責決議を乱発し、公債特例法案を人質に審議拒否をしたりしたら、物事は前に進みません。そんなことを繰り返していいのでしょうか。そうなったら日本は目も当てられません。与党も野党もなく、われわれは、この一線を乗り越えていかねばなりません。

実は、戦前の一時期、日本の政党政治は、国民の熱狂をもって期待された時期がありました。そしてそのときは、日本が国難に直面したときでもありました。にもかかわらず、当時の政党は足の引っ張り合いを繰り返し、7年間で6人の総理が登場しました。今と同じように。

結局、政党は国民からあきれられ、国民の期待が向かった先は、維新を唱える第三極でありました。つまり、昭和維新を唱えた青年将校たちだったわけです。その後の日本の歴史は言うまでもありません。

歴史は繰り返すといわれますが、繰り返させてはなりません。

今の国政に一番必要なのは、まず、日本の政治は、政権交代がしばしば起こるといふ新しいステップに入ったという時代認識と、そういう時代認識の下で、いちいちの政策もさることながら、政策を決め実行できる新しい政治秩序というものを作り上げていくことではないかと、さいとう健は思います。

例えば、年金制度のようなものは、政権が変わるごとに変わるようでは、皆さんも将来設計を立てることができません。こういうものは、与党も野党もなく協力し合いながら安定した制度を作り上げるべきです。現に、スウェーデンでは、与党と野党が7年かけて協議し制度を作り上げました。

(裏面へ続く)

国と国の争いである戦争においてさえも、学校や病院は砲撃しないようにしようとか、核兵器は使わないようにしようとか、捕虜は大事にしようとか、そういう最低限の節度があります。政党と政党の争いにおいても、年金制度のようなものは砲撃しないようにするという最低限のルールが必要ではないでしょうか。

こういった話を至るところで主張しておりましたら、朝日新聞が興味を持ちまして、記事になりました。左に記事を掲載しておりますので、是非ご覧いただければ幸いです。

〈さいとう健が考える新しい政治秩序〉

- 1. 不戦ゾーンの設定**
 …年金、医療制度、あるいは、一部の外交のような分野は政争の具にしない。他の分野でどんなにやりあっても。
- 2. 問責決議のルール化**
 …問責決議＝審議停滞とならないようなルール化。
- 3. 総理や大臣の海外出張の容易化**
 …外交を優先し総理や大臣が国際会議にもっと参加できるように国会でルール化する。
- 4. 国会質疑のレベルアップ**
 …妙案はありませんが、少なくともさいとう健は、揚げ足を取る質問はしないと宣言しながら質問することを心がけています。

朝日新聞 平成24年8月28日 朝刊4ページ

再生
日本政治

「休戦」して決める国会に

自民党衆院議員 斎藤 健さん



さいとう けん 1959年生まれ、83年に通商産業省(現経済産業省)入省、2004年に埼玉県副知事に出向、09年衆院比例南関東ブロックで初当選、国会で菅政権を厳しく追及する質問がラップ調に加工作されてネット上で話題に。
(長島一浩撮影)

消費増税関連法は民主、自民、公明の3党首合意で成立しました。「ねじれ国会の中で、重要な物事を進める貴重な前例ができた。2大政党が政権交代を繰り返す時代に入ったからこそ、これをどう乗り越えるかが最大の政治課題だ。ただ、成立に至る過程は戦前をほつとさせるものでしたか」

「1920年代の政友会と民政党の2大政党時代には、猛烈な足の引つ張り合いが行われた。第1党の首相が行き詰ると第2党に代わるルールのため、少数与党でねじれも常態化。23年に関東大震災、29年には世界大恐慌と激動の時代なのに首相は約1年ごとに交代した。政治が国民の信頼

を失って軍部が台頭し、32年の5・15事件で政党政治は終わる。同じことを繰り返してはならない」

「妙案はありませんか。私は国会に『休戦ゾーン』を設けようと言っている。年金や医療の制度が政権交代のたびに変われば、国民は将来設計が立てられない。そこは与野党の協力で安定した制度を作ればよい。首相や大臣は海外に出やすくすべきだ。外国では日本の国益を目的に追求させ、他分野での論争は徹底的にやる。政権交代が起きる前提で物事を動かさないといけない」

「国会質問の際、『私は揚げ足取りの質問はしない』と前置しますね」

「聴くに堪えない議論が横行しているので、抵抗の意味も含めている。自民党の1党支配だった時代と違い、国会で論争し、修正して政策を作らなくてはいい。『この人の言うことは一理ある。それなら修正しよう』という論戦でないといけない」

「そのために必要な政治家の資質は、『物事を多角的に検討できれば、最終的に判断を間違えない。そういうゼネラリストの養成は不可欠だ。ただ、どんな逆風が吹いても小選挙区で生き残ろうと思つたら、選挙活動以外に時間が使えない。毎日、選挙区で動かないと不安で仕方がないのが現実。ゼネラリストになるための勉強なんかない。選挙がつらいうから、今のままでは選挙のプロしか生き残れない」

(聞き手・小野田太郎)



今年も元気な園児たちの運動会に顔出し参加。早くから場所取りをされた方もお疲れ様でした。



年に一度行われる人形供養会を見学。思い思いの人形が供養されるのを静かに見守りました。

メルマガ **さいとう健**
 けん
 名前・住所の登録不要。
 月刊さいとう健では伝えきれない内容満載。
 返信すれば匿名で意見を伝えられます。
<http://www.saito-ken.jp/info/melmaga.html>



討議資料

やっぱりこの界に!